

昭和六年五月發行

青丘學叢

第四號

青丘學會



ものこも思はるゝが、尙ほ考究の必要があらう。
江華島の舊本は、初め同島の摩尼山史庫に藏めてあつたが、後ち鼎足山城に移された。鼎足山史閣の設けられたのは顯宗の元年で、留守柳滄といふものが之を建てたが、實録の此處

に移されたのは、肅宗（第十代）の時である（江華府。鼎足山史閣は肅宗の三十三年、一度改建せられたが、此時には、既に實録は此處に藏せられて居たらしく、此の後は其の儘安定して、今日でも尙ほ鼎足山本と呼ばれて居る。）（完）

鬱陵島の名稱に就て（補）

——坪井博士の示教に答ふ——

田 保 橋 潔

青丘學叢第三號に掲載せられた拙稿「鬱陵島、その發見（註一）領有」の一篇は、倅にして先輩同學諸氏の注意を惹き、懇篤有益なる示教を辱うするを得、就中東京帝國大學名譽教授文學博士坪井九馬三氏より、松島竹島（註二）の名稱について、特に書狀を寄せられ、上記拙稿の錯誤を叱正せられたのは、筆者に於て、感激措く能はざる（註三）ところである。

も拙稿鬱陵島、その發見（註一）領有は、日本海中の孤島たる鬱陵島が、ヨーロッパの航海家に發見せられた事實を述べ更に同島の主權が日鮮兩國間の困難なる交渉となり、遂に日本國政府の平和的讓歩によつて、圓滿な解決を告げた願末を論證するにあり、鬱陵島の名稱について考證し、その當否を争ふのは本志でない。此故を以て、筆者は坪井博士を初め、

東京帝國大學文學部教授文學博士池内宏氏（註二）、同理學部教授理學博士中井猛之進氏等の鬱陵島に關する研究あるを聞知しつゝ、特に此問題に深く立入るを避け、簡單に筆者自身の至當（註三）信ずる説を申述べたのである。爲に考證精密を缺き、用語（註四）妥當を得ないところあるは、坪井博士の指摘せられるが如くで、恐悚の感に堪へないものがある。此考は今日に於ても同様であるが、上記小篇に於て、多少共鬱陵島の名稱について云爲した責任上、所謂松島、竹島の名稱に問題を限り、筆者自身の假説を述べて、坪井博士初め、先輩同學諸氏の叱正を仰ぐこととする。

坪井博士の説は、大正六年の交、朝鮮總督府囑託として、鬱陵島植物調査に従事せられた、中井東京帝國大學教授の報

1931年

告に基づき、考證せられたもので、その詳細は雜誌歴史地理(註)、中井教授の鬱陵島植物調査書に見えて居るが、筆者に寄せられた昭和六年三月二十二日附書状は、簡にして要を盡して居るので、左にその一部を掲げる。

數年前、朝鮮總督府の命を奉じて、中井猛之進君鬱陵に赴き、其植物を精査あり候節、松島竹島の由來をも調査せられ候、是れは隠岐よりの移民が、植民地の前途を祝福して、本島を松島、其東方の沖にある附屬の岩嶼を竹島と呼び申候次第之由、又隠岐の東北沖にあり、アシカの繁殖地にして知られ、普通海圖に Liancourt と申しあるは、隠岐人が夙く、タマゴ島——卯島——と申來りしことにて、之れを竹島としたのは、固より「自然の數で」はありませぬとの由、中井君の説に御座候。(尙御入用に候はゞ、小生の質問に答られ候、中井君の手紙を御目に懸候ても宜敷候)

是を要するに、坪井博士は日本海中、著しき島嶼三個を擧げ、その最も日本に近きものより、漸次に卯島・松島・竹島とせられるもので、現行海圖に比定すれば、竹島・鬱陵島・

なる。

次に是等の諸島の地理を説明するのは、以上諸島の名稱を比定する上に、重要な事と信ぜられる(第二島即ち鬱陵島については、既に述ぶるところあつたので是を略する)。

第一島洋名リヤンクウル岩は、故理學博士山崎直方、理學士佐藤傳藏兩氏の記述によれば、隠岐群島の西北約八十五哩の位置にあり、北緯三七度一四分、グリニチ東徑一三一度五分、『島は一つの狭き水道(長さ三百三十米、幅凡百米、深さ凡そ五尋)を距て、東西に相對峙せる二個の主島、其の附近に碁布散列せる數個の小岩礁より成る、是等の岩礁は概ね扁平にして、上部僅かに水上に顯出するに過ぎず、主島は全く峨々たる岩石にして、海風常に全面を吹き荒み、島上一の樹木なく、僅かに雜草を生ぜるを見るのみ、沿岸は全く斷崖絶壁にして、殆ど攀登すべからず、所々に奇形の洞窟ありて、海豹群の棲所となれり、島上飲料水更に無く、従つて人の住居に適せず、唯々毎年四五月頃より、七月頃に至るまで、海豹多く此處に群集するを以て、漁者の屢々行いて此の附近に出獵するあるのみ』。(註) 中井教授の報告によれば、鬱陵島最高

鬱陵島の名稱に就て(田保橋)

竹嶼(Tei Sonu)に當る。今更に之を明瞭ならしめるために、以上三島嶼の洋名、朝鮮名、現行海圖、坪井中井兩博士説を表して左に掲げる。

假番號	洋名	朝鮮名	同上	海圖	坪井	中井
一	Liancourt			竹島	卯島	卯島
二	Dagelet	鬱陵島	음릉도	鬱陵島	鬱陵島	鬱陵島
三	Boussole	竹島?	대섬?	竹嶼	竹嶼	竹嶼

第一、第二兩島の名稱については、既に略述したが、第三島の名稱については、更めて説明を要する。洋名「ブソウル」はかのド・ラ・ベルウズ乗艦より取つたものであるが、彼自身作成した鬱陵島海圖に記載がない。事實上ド・ラ・ベルウズは、鬱陵島東南一帯の測量を終らず、従つて今問題となる第三島の存在を確認し得なかつたものである。而して現行海圖には、之に洋名ブソウル、朝鮮名竹嶼を擧げて居るが、共にその據るところを確認するを得ない。竹嶼の音を Tei Sonu としてあるのは、竹島(竹嶼)の訓讀であり、之を音讀すれば音三

峯、上峯より大氣清澄の日、第一島を遠望し得る云々。(註)

第三島の竹島或は竹嶼と稱するものは、鬱陵島の東方約二キロメートルの海中に孤立せる巨岩で、周囲は殆ど百メートルに達する岩壁を以て包まれ、登攀極めて困難である。但し島上は平坦で、耕作に堪へ得る云々。(註) 之を要する。本島は、鬱陵島附屬岩礁十數個中最大のものに過ぎず、獨立せる一島にあらずる事注意を要する。

以上第一、第二、第三各島の現在を確認した上で、松島、竹島の名稱がそのいつれを指すか、此に考究するのを以て順序としやう。

第一島を中井教授は、卯島(タマゴシマ)の名を以て稱せられ、坪井教授も之に従はれて居るが、卯島の名稱は中井教授の報告に初めて見えるもので、古記録には一切所見がない。同教授の説は後段に述べる隠岐國故老の言に基いたものであるが、更に確實なる文獻上の所據を示されるやう希望する。(註)

第二島即ち鬱陵島の日本名を松島(マツシマ)と稱する事は、筆者の既に述べたところで、何人も之に疑義を有するものがない。

第三島を竹島と稱する事は、最も困難なる問題である。竹島は日本名タケシマか、朝鮮名竹島(訓)か、或は奇丘(音)であるかすらも判明しない。中井教授は、竹島を日本名タケシマなりとし、竹島は或は武島タケシマとも記載するものあるを以て、そのいづれを正しむべきか、鬱陵島開拓者の一人なる道洞居住片岡吉兵衛氏について正した結果、竹島を以て正しきものとせられ、更に松島、竹島命名の由来として、『之れ松が繁茂し、竹が繁茂せる爲めに非ずして、松竹並稱し、目出度き意に用ゐるし由、日露戦争當時海軍の報告書に松島とある所以なり』と主張せられた。坪井教授は全く之に意見を同じうせられ、東國輿地勝覽、芝峰類説等の記事を、全くの想像より出でたものとして抹殺せられたものである。(註10)

竹島に武島の漢字を宛てる事は、中井教授は隠岐、出雲邊の住民の慣用として居られるが、之も文献について引據を示さるれば大幸である。但此に最も注意を要するのは、芝峰類説、朝鮮通交大紀、竹島紀事、竹島文談等に見える磯竹島或は竹島は、第二島即ち鬱陵島を指すもので、その附屬の岩礁を指すものでない事は、毫も疑を容れるを許さざるところである。

ある。

第三島洋名ブソウル岩はド・ラ・ペルウズ復命書並びに海圖に記載せられず、新增東國輿地勝覽にも見えない。思ふに、最近朝鮮國政府が西北開拓使を置き、金玉均を長官に宛て、永久的殖民を計畫せしむるまで、無名の岩礁であつた事(註11)信ぜられる。その後同島殖民日本人、若くは朝鮮人により竹島と稱せられ、海圖はそのまゝ踏襲したものであらう。(註12)

以上論ずるにころによつて、第一島洋名リヤンクウル岩、第三島洋名ブソウル岩の名稱は、文獻上猶確むるを得ず、但第二島鬱陵島のみ一島にして、松島、竹島の二名を有する事を論證する事を得た。筆者は更に江戸時代並びに明治初期、地理學的知識の缺乏よりして、第一島洋名リヤンクウル岩(註13)、第二島ダジュレエ島が混同せられる場合尠しとせず、爲に本來第二島に命名せられた松島、竹島の名稱が、兩島の間に分たれた例を此に擧げやう。その第一は隠州視聽合記である。

戊亥間、行二日一夜有松島、又一日程有竹島(俗云磯竹島、多竹魚海藻)、此二島無人之地、見高麗猶雲州望(註14)、然則日本之乾地以此州爲限。

此記事に見える行程には猶研究の餘地があるが、その所謂竹島は、俗に磯竹島と稱し、竹魚海藻に富める點よりして、第二島朝鮮名鬱陵島を指すもので、竹島と隠岐群島の中間に位する松島は自ら第一島リヤンクウル岩に宛てられる結果なる。此種の説の代表的なるは、明治初期の日本歴史地理學者として特筆せらるべき故外務權大屬坂田諸遠氏の記事である。

松島竹島ノ二島ハ、往昔隠岐國ノ管内ニシテ、同國福浦ヨリ戊亥ノ方、其距離四十里許ニ松島アリ、〔竹島ハ〕松島ヨリ遙ニ離レ、朝鮮ニ近キ事、琉球ノ八重山ト、臺灣福州ノ地ヲ見ルニ等シ、伊藤長胤カ猶軒小録ニハ、隠州ヲ去ル事三十里、北ニ磯竹島アリト、記セシハ證スルニ足ラス、隠州視聽合記ヲ考フルニ、〔中略、上ニ引用セルニ同ジ〕ト見エタレハ、粗其海路ノ里程ヲ推シテ知ルニ足レリ、大日本國輿地路程全圖ニハ、隠岐ノ北西、北緯三十八度ニ松島竹島ノ二島ヲ載ス、竹島ハ朝鮮ノ方ニ位置シ、松島ハ隠岐ノ方ニ位置ス、水戸人長久保赤水カ唐土歷代州郡沿革地圖中、亞細亞小東洋圖ニモ、竹島

鬱陵島の名稱に就て (田保橋)

松島ノ二島ヲ載セ、大日本四神全圖ニハ、朝鮮淮陽府江城ノ東海、北緯三十八度ニ竹島アリテ、其東南同緯度中、隠岐ノ方ニ松島ヲ載セ、ホウリルロツクト記セシハ、洋人ノ呼ヘル島名ナルヘシ、此圖ハ松島ヲ大ニシ、竹島ヲ小ニスレトモ、他圖尙竹島ヲ大ニシ、松島ヲ小ニス(註15)〔下略〕。

是に類する説は一々枚擧に達なき程であるが、前號に引用した明治九年七月瀬脇貿易事務官宛武藤平學請願書の如きもその一で、文中『松島と竹島は共に日本と朝鮮との間に在れども、竹島は朝鮮に近く、松島は日本に近し』と見え、松島を以て第一島洋名リヤンクウル岩に比定するが如きも、その實武藤の所謂松島は、リヤンクウル岩の如き岩礁にあらざる事は、請願書に見ゆる松島の記事を、前に引用した山崎博士の記事に比較すれば、一目瞭然で、此場合鬱陵島を指したものである。(註16)

かくの如く第一リヤンクウル岩、第二島ダジュレエ島は、江戸時代より明治初期に互り、常に混同せられ、松島、竹島の名稱は、同時に兩島の間に混用せられたのは寧ろ普通であ

る。従うて最近第二島の名稱が、松島を確定した以上は、その一名竹島が第一島に移されたのも決して不自然とは考へられない。(その方が學術的の命名法であることは筆者は云はな^らず)。

松島、竹島が第一、第二兩島間に混同したことは上述の如くであるが、此名稱が第二、第三兩島間に混用した例を、文献上筆者は所見がない。事實上、第三島は第二島の屬島なので、上述の如く、最近同島に永久的に移民の行はれるまで、無名の岩礁であつた事と信ぜられる。

第二島鮮名鬱陵島を、磯竹島、竹島又は松島と稱した時代及び理田に至つては、筆者は未だ首肯し得べき説を見ない。磯竹島、或は竹島の名稱は、既に江戸時代以前に存し、その竹を産するを以て名とした事實は、新增東國輿地勝覽、朝鮮通交大紀等に見え、更に中陵漫録に之を裏書する傳聞を載せて居る以上、俄かに否定し得ないものがある。^(註10) (此竹云ふのも、植物學上の定義では、竹と稱し得ざるものであるかも知れないが)。松島の名稱の由來は詳かでないが、かのドクトル・フィリップ・フンツ・フォン・シーボルトが、ド・ラ

ヘルツの航跡を研究して、マツノエ島を den Japanern Inngst bekante Inselchen Matsushima 云つて居るのから考ふるに、尠くとも十九世紀初期には、廣く此名を以て知られて居たと解すべきである。^(註17)

最後に松島、竹島の命名に關する片岡吉兵衛氏の説は如何であらうか。地名の解釋に關する故老の説の俄かに信を措き難き事は、古風土記の編纂以來、一千數百年間吾人の祖先が痛感したところである。

以上述べたところは、前後煩雜を免れ得ざるものがあるが、之を要約するに、松島、竹島の二名は、共に時代は明確なるを得ないけれども、日本人によつて、第二島即ち朝鮮名鬱陵島、洋名ダジュレエ島に命名せられたものである。然るに何時の頃か、第二島は第一島洋名リヤンクウル岩と混同せられ、松島、竹島の名稱は、或は第一島に、或は第二島に附せられ、甚だしい混雜を來した。明治に至つて鬱陵島の日本名を松島と確定せられるに及び、松島より更に舊き來歴を有する竹島の名稱が、却つてリヤンクウル岩に移される結果を生じたものである。而して鬱陵島東方海中約二キロメートルに位置す

る岩礁を、竹島と稱したのは、最近の事にかゝるものゝ如く、筆者の論ずる年代に於ては、猶無名の岩礁なりしを疑ふものである。(昭和六年四月十九日於漢城駱山下梨花草堂稿)

(註1) 青丘學叢第三號(昭和六年二月刊)一一三〇頁、

(註2) 朝鮮高麗朝に於ける東女眞の海寇(滿鮮地理歴史研究報告 第八 大正十年刊)二一四—二二一、二八九—二九〇頁、

(註3) 鬱陵島植物調査書(大正八年朝鮮總督府刊)、

(註4) 鬱陵島(歴史地理第三八卷第三號大正十年九月刊)一六五—一六九頁、竹島に就いて(歴史地理第五六卷第一號昭和五年七月刊)三三—三四頁、

(註5) J. F. Galaup de la Pérouse, Voyage autour du monde, 1785-1788, Atlas carte 45.

(註6) 大日本地誌卷六中國(明治四十年刊)一九七—一九八頁、本書リヤンクウル岩に關する記事は、日本水路志に據るものゝ如くであるが、同書を得ないので姑く大日本地誌に從^ふ。

(註7) 鬱陵島植物調査書一頁、

(註8) 日本地理風俗大系卷一七朝鮮下(昭和五年刊)四〇—四七頁、本書鬱陵島に關する記事は、京都帝國大學理學部講師 春本篤夫氏の執筆にかゝる。

(註9) 鬱陵島植物調査書一頁、歴史地理第三八卷第三號一六七—

鬱陵島の名稱に就て (田保橋)

一六九頁、

(註10) 鬱陵島植物調査書三一六頁、歴史地理第三八卷第三號一六一—一六七頁、

(註11) 善隣始末附錄、

(註12) 本稿起草に當り使用した水路部海圖は、第三〇六號朝鮮東岸竹邊灣至水源端である。

(註13) 今隱州視聽合記を手許に有しないので、石州濱田松浦無宿 八右衛行竹島渡海密商一件參考に引用せられたところに從つた。

(註14) 明治九年八月六日坂田諸遠上申書(松島關係書類所收)、

(註15) 青丘學叢第三號二六一—二八頁、

(註16) 青丘學叢第三號二二—二三頁、

(註17) Ph. Fr. von Siebold, Geschichte der Entdeckungen im Seegebiete von Japan. Leyden, 1852. S. 16.

【附記】「鬱陵島、その發見と領有」、並びに本篇を草するに當つて朝鮮總督府修史官中村榮孝氏の示教を煩はしたところ抄しとせない。又兩篇に引用した史料は、主として京城帝國大學附屬圖書館、及び文部省維新史料編纂會に得た。此に附記して、中村修史官及び兩インスティテュットに謝意を表す。